日本のものとしての武道ツーリズムと 沖縄空手をめぐるモビリティーズ

柄 本 三代子

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第10号 抜刷
2025年（令和7年）3月20日

日本のものとしての武道ツーリズムと 沖縄空手をめぐるモビリティーズ

柄 本 三代子

Martial Arts Tourism as a Japanese Thing and Mobilities around Okinawan Karate

ENOMOTO, Miyoko

Abstract

Tourism for international visitors is one of the few fast-growing industries in Japan. One measure to promote tourism is martial arts tourism. Martial arts were first positioned as an ancient Japanese tradition and rediscovered as a tourism resource, convinced that it would become a key feature of Japanese tourism. Martial arts tourism incorporates a 'Japanese' element, similar to what is expected of 'Budo'.

This paper will also consider martial arts tourism as a policy but will limit its focus to karate. There are two reasons for this. The first reason is that karate, as a type of martial arts, has gained popularity and given rise to dojos and enthusiasts worldwide. The second reason is that karate originated in Okinawa and has travelled through a unique and multiple route of transmission overseas, involving a variety of human mobilities in the dissemination process and creating mixed representations of 'Orient', 'Japan' and 'Okinawa'. In this context, this paper considers the geopolitics of Okinawa, including its geographical condition as a southernmost prefecture hosting a US military base, substantial. However, this paper does not discuss the differentness or cross-culturality of Okinawan karate. This is because we do not argue from the self-evident point of view of being different but rather consider how the perspective of being different was brought into the discussion.

For these reasons, the purpose of this paper is to show the necessity and significance of discussing karate's mobility in a way that is separate from martial arts theory while considering its various peculiarities. It must be said that martial arts tourism, including karate, can only be established as inbound tourism if it is outbound once transmitted overseas. The role of tradition and authenticity associated with Okinawan karate is also discussed in this context.

キーワード：tourism, karate, Okinawa, Japan, mobility, martial arts

目 次

- I. はじめに
- II. 空手をめぐるモビリティーズと痕跡
- III. 「日本のもの」としての武道ツーリズム
- IV. 他国と競合する「武道」と「伝統」
- V. 沖縄空手の歴史とツーリズム
- VI. おわりに

I. はじめに

Covid-19のパンデミックをはさんでもなお、海外からの客を見込んだツーリズムは、日本において数少ない急成長中の産業と言っていただろう。日本において、いわゆるインバウンドの需要はまたとない経済再興の契機ととらえられており、それは政策にも反映されている。海外の観光客をよぶために「日本的なもの」がアピールポイントとして重要視されている。そのイメージはどのようにつくられているのか「日本」の痕跡をたどることが本論の目的である。

ツーリズム振興策のひとつに本論で検討する武道ツーリズムがある。武道を人びとの移動、すなわち後述するモビリティーズの目的とするということは、武道を日本古来のものとして先ず位置づけ、日本観光の目玉となることを確信し、観光資源として再発見したということになる。そしてその武道の種類として、柔道、剣道、弓道、相撲、合気道、少林寺拳法、なぎなた、柔剣道、そして空手といったものが含まれている。要するに武道を通して「東洋的身体観」をある種の身体技法に凝縮させ海外で受け入れられる過程は、さまざまな形で「日本」の表象や「日本人らしさ」が期待されながら実践されているのだ。

武道ツーリズムにおいては、たんなるスポーツツーリズムにはない「日本的な」要素が必要とされており、それはそのまま「武道」そのものに期待されているものと相似をなしている。これについては、フランスに渡った柔道の事例でやはり、礼節などを含む道徳的あるいは倫理的価値づけもまた、フランスの親たちが子どもに柔道をとおして施したい教育内容に含まれるし、あるいは競技人口獲得のための「教育的効果の喧伝」のためにもまた重用されることになることについての研究がすでにある（星野他 2022）。

また本論は、政策としての武道ツーリズムを考察しつつも、具体的には空手を中心として論を進めることにする。その理由は二つある。ひとつめの理由として空手は、今日武道というよりも格闘技 (Martial Arts) の一種として世界的人気を博しており、世界中に道場や愛好家を誕生させているということがある。その数は約200か国で1億人以上ともいわれている（柄本 2023: 133）ともあれ今般、その人気を反映してか日本国内外の空手実践家たちによる資料や文献は少なくないのだが、空手そのものに対する学術的研究の蓄積はまだ乏しいと言っていい現状がある。空手の学術的研究を蓄積していくことは、グローバル化過程における身体技法と表象をめぐるモビリティーズ論すなわち「時間をかけてさまざまな空間を横断して重層的に営まれ組織化されている経済・社会生活が、さまざまなかたちの旅行、交通、通信に対する分析へとつながられていく」（Urry 2007=2015: 16）といった新たな説明可能性を提示することになり、文化研究の進展という意味でも意義があるはずだ。

ふたつめの理由として空手は、他の武道とは異なる展開過程をへてきたという事情がある。そもそも空手は琉球時代の沖縄で誕生したのだが、柔道をはじめとした他の武道とは異なる地理的歴史的背景を有し、海外へ伝わる際にも独特かつ複数のルートを経ている。そのルートとは、主としてハワイを中心とした沖縄移民によるもの、沖縄米軍基地に駐留した後に帰国したアメリカ軍人によるもの、そしていったん武道として認められ日本のものとして組織的に「本土」経由で伝播したもの、また沖縄において直接的教示を受けた者によるもの、ということになる。つまり伝播の過程にはさまざまな人のモビリティが関与し、「東洋」「日本」「沖縄」の表象が錯綜している。先述した政策としての武道ツーリズムにおいて「日本的要素」をかもし出す際に当然のことながら沖縄が除外されているわけではない。いっぽうでルーツをたどってあえて「日本」ではなく沖縄を訪れる海外の空手家も多く、沖縄固有の観光資源としても空手は注目されてきている。このような状況における、米軍基地を抱える南端の県という沖縄の地理的条件を含む地政学的ポリティクスについて本論は重要なものと考えている。ただし本稿は、沖縄空手の異質性や異文化性をめぐる考察ではない。なぜならば、異なるということをも自明視するところから論じるのではなく、「異なるという視点」がいかに持ち込まれたのか、という地点から考察を開始する必要があると考えるからだ。この点については富山の「日本人」と「沖縄人」に関する議論に示唆を受けている。すなわち彼は「『沖縄人』がいかに設定されるかは、同時に「日本人」になるということがいかなる回路として準備されているかを決定している」と述べている（富山 1990：4）。つまり沖縄空手も、いったん日本のものとみなされる回路が用意される必要があったのであり、しかしなお沖縄空手とあえて名の必要も現状としてあるのだ。

以上の理由から、空手の有するさまざまな特殊性に鑑みつつ武道論とは切り離れた形で空手を論じることの必要性和意義を示すことも本論の目的となる。人のモビリティにともなう身体技法の伝播の過程の歴史的背景に鑑み、実際にイギリスで空手を行う場と人びとを対象としておこなったフィールドワークで得た知見も参照しつつ、空手をめぐるツーリズムと、さらにルーツをさかのぼって沖縄へ回帰する武道ツーリズムの今日的意味について考察する。また本論は「回帰してきたモビリティ」として武道ツーリズムにおける「インバウンド」を考察する。なぜなら、空手を始めとした武道ツーリズムとはいったん海外へ伝播されたというアウトバウンドあってはじめてインバウンドとして成立していると言わざるを得ないからだ。またそこで沖縄空手に付随する伝統や真正性のもたらす役割は大きいという点について明らかにする。

Ⅱ. 空手をめぐるモビリティと痕跡

さてこの章では、本論の前提とする理論的枠組みについて確認しつつ論をすすめていくことにする。まずツーリズムに関してであるが、その学術的関心は高まってきている。その中のひとつである『観光のまなざし』という著作の中でUrryらは、次のように述べている。

観光のまなざしの概念は、なぜ、ある人が旅に出たいと思うかということの説明のために用いられているのではない。そうでなく、私たちの言いたいのは、多様なまなざしの体系的でかつ整合性のある特質についてなのである。（Urry and Larsen 2011=2014: 27）

すなわち、なぜそこへ行きたいのかといったツーリズムの動機を説明するということよりも、出かけた先や訪れる人びとをはじめとした多様なまなざしの交錯と介在について議論しようとし

ている。したがって、そこで重視されるのは、「観光のまなざしの概念を、パフォーマンスとして、身体的行為として、とくにそれぞれのまなざしが言説や記号とあわせて行動やモノの関係にも同様に依拠していることを再考」することになる (Urry and Larsen 2011=2014: 22)。ツーリズムにおいてはただたんに人が移動しているのではなく、たとえば行き先がどのように提示されイメージし期待するかといったように、さまざまな表象も人とともに移動している。換言するなら、ツーリズムをめぐるさまざまな表象や行動やモノの関係に着目するということだ。たとえば「日本のなもの」もまた、人びとの移動にまつわっているのだ。日本へいざなうためのイメージもあるだろうし、そもそも元から日本について有していたイメージもあるだろう。そこで使われる記号は、典型的には「富士山」かもしれないし、「桜」、「漢字」、「清水寺」、「着物」、「舞妓」かもしれない。すなわち、ツーリズムというと人の移動に関心が集中してしまうのだが、それに付随してさまざまな要素が移動している点に留意が必要であるということだ。空手の例でいうなら、経験者が移動する際には、その人物は沖縄に端を発する「突き」や「蹴り」「受け」「手刀」「型」「礼(おじぎ)」「正座」といったなんらかの身体技法を身につけていると考えられる。そしてそれらの多くは海外での稽古の際にも日本語のままで使用されているので、おのずと「日本語」にもふれていることになる。使用言語だけの問題ではなく、それとともに伝授され身につけていく身体技法といった身体的行為もまたツーリズムに介在するものとしてとらえなければならない。

さらにUrryは、何らかの社会なるものを分析する際に「社会的な実体は、人間とこれらの非人間的な構成要素とを結びつけるネットワークを必然的に含ん」でいることに留意しなくては行けないし、社会とはそもそも人間だけで成立するものではなくさまざまなものや記号によって成立するハイブリッドなものであると述べる (Urry 2000=2006: 26)。さらに社会関係は必然的にモビリティーズをとまなっているとして、以下のようにも述べている。

社会諸関係はすべて移動〔mobilities〕ないし潜在的移動〔mobilities〕を伴っており、移動〔mobilities〕は当の社会諸関係のありように影響を及ぼしている。さらに、社会科学は主体の相互作用にあまりにも集中しており、言わば社会生活の基盤を整えている永続的なシステムを無視している。この永続的なシステムは場所から場所、人から人、出来事から出来事への人、理念、情報の移動〔mobilities〕を可能にしているが、その経済的、政治的、社会的意味合いについて社会科学ではほとんど検討されていない。(Urry 2007=2015: 25) ([ ] 内は筆者による。以下同じ)

本論はこのような知見に示唆を受けつつ、移動先やモビリティーズの過程を「よその場所」として認識することで「情動の場」となる契機について考察するものだ (Urry 2007=2015)。要するに、ツーリズムをたんなる人の移動ととらえるのではなく、そこにはさまざまな構成要素がネットワークとして介在しているという視点が重要だということなのだ。

以上のような関心は、移動の過程で残されていくさまざまな痕跡をたどることへの関心にもつながっている。一例に過ぎないのだが空手の場合具体的には、「空手を伝える人」、「ともに稽古する先輩」、「動作」、「呼称」、「気合」、「礼(おじぎ)」、「正座」、「道着」、「帯」、「胸のバッジ」、「型」、「呼吸」といったさまざまなものがある。そしてこのことが内包する重要性についてLatourは次のように述べている。「社会学を、『社会的なもの科学』と定義するのではなく、つながりをたどること (tracing of association) と定義しなすこと、社会科学の本来の直感に忠実であり続けることができる。(中略) 社会的という形容詞は (中略) それ自体は社会的でない事物同士

のある種の結びつき (a type of connection) を指し示すものである。」(Latour 2005=2019: 15)。さらには、「そこが場所であるためには、あらゆる場所は他のどこか行き来するひとつないし幾つかの運動の道筋に位置しているはず」なのだ (Ingold 2007=Kindle の位置No. 229-230)。

本論の関心からするとここでいう「痕跡」には、身体へ刻印される技の継承も含んで考えるべきだろう。長年の蓄積から生まれたさまざまな考えをミックスしたり変更したりしながら、一回一回の「いま」の稽古において身体を使いながら長年にわたって師範や先生、先輩から伝授されていくのだ。これは身体にとどめられていく痕跡と言えよう。

以上の知見を前提とするなら、武道ツーリズムに関する考察において重要なことのひとつとして、「インバウンド」の方向だけに注目するのではなく、さまざまなモノや人や表象が構成要素となってネットワークをつくってきた「アウトバウンド」そのものや、そのような「アウトバウンド」があってはじめて「インバウンド」が成立している、という点がある。

先述したLatourはさらに、「時間はつねに折り畳まれている」とも述べている (Latour 2005=2019: 385)。型や技として伝承されてきた動きのひとつひとつに「時間」が、まさに伝統として織り込まれている。しかも空手の場合、沖縄の時間と、「本土」の時間と、さらに後述するように武道のルーツをたどれば中国や東洋の時間、といったように地域ごとの時間が重なって織り込まれている。先生たちや先輩たちそれぞれの説明の仕方、言い方が多少違っていても、それぞれの時間を重ねながら継承しているともいえる。

そして、身体の動かし方の模倣と口頭での説明によって、折り畳まれた時間を、自分の身体を使用しながらいまに解き放つ。さらに、折り畳まれた時間を自らの身体に刻んだ人たちは、その技法とともに移動する。沖縄へきてその技の発祥を確認し、道場の先生や先輩の教示によって自分の未熟さを確認することにもなるだろう。そしてそこでまた新たな技法を身につけ、頭で理解するなどして持ち帰ることになる。このような連関とネットワークの中で空手をめぐるモビリティーズをとらえる必要がある。

Ⅲ. 「日本のもの」としての武道ツーリズム

海外で空手と遭遇し実践する人びとは、空手のもつモビリティや表象、たとえば日本から渡ってきた「日本人の先生」や「黒帯」「型」といったものをさまざまに解釈しつつ、どれくらい稽古をしているかとか何ができないかといったような自らの身体経験と結びつけて理解しようとしている。そしてそのような愛好家たちは、日本や沖縄への関心を深めいちは訪れたいと口にする。あるいは、何度もすでに日本を訪れた経験のある人びとも出会った。そのうちのひとりの訪日は、ほとんど観光することなく日本の道場で日本人の先生に空手を教授してもらうことが目的だった。ルーツをたどることにも熱心な彼らにとって、それはたんなる観光ということではなく、自らの身体にすでに刻印されているコトの意味を再確認する旅にもなっている。そして、世界中に愛好家が存在し空手が貴重な観光資源となることの発見は、日本政府を中心とした武道ツーリズム振興策へと展開してきている。武道ツーリズムの中でも空手が特に注目されていることは、2020年1月にアメリカとイギリスを調査対象地としてJTBコミュニケーションデザインによって行われた「武道ツーリズムへの興味関心にかかわる調査」でも明らかになっている。具体的には、武道のなかでも、アメリカで42%、イギリスで32%と最も体験してみたいものが空手であった (JTBコミュニケーションデザイン 2020)。要するに空手というひとつの文化の意義が、「日本のもの」として海外に知らしめられ、確認され、めざましく愛好者を誕生させ、それに

呼応して日本国内で観光資源として再発見されたのだ。

そんな背景に関心が高まり誕生した武道ツーリズムは、現在において政策として明確に推進されてきている。その振興は、観光庁を中心とした2011年の「スポーツツーリズム推進基本方針」策定が一つの契機となっている。これが2018年に「スポーツツーリズム需要拡大戦略」として進展し、そこで新規重点テーマとして武道ツーリズムがとりあげられたのだ。その内容は、たとえば経済産業省のホームページで次のように説明されている。「空手をはじめ、武道は海外でも愛好者が多く、受入態勢やコンテンツを整備することで、海外の愛好者・日本文化への関心が高い層に対し、発祥地である日本への関心・訪日意欲を喚起できる」(https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/sports_future/pdf/006_03_00.pdf)。すなわちここで武道ツーリズムは、スポーツツーリズムの一環とみなされ「みる・する」スポーツとも称されている。そして空手はその筆頭としてやはり位置づけられている。

しかし、武道をスポーツのひとつととらえるのなら、とくに日本らしさというものを求める必要性は薄いのではないだろうか。それは、柔道がオリンピック競技に位置づけられる過程で、その競技性がより重要視されるようになってきた経過を見ても明白だ。たとえば、より速くより強く、ということを経うということであれば、特に「日本」というモチーフは必要ないだろう。いっぽうでこのことが意味するのは、日ごろの稽古は必ずしも日本人が教える必要はないということでもあり、とりわけ日本人にしか技を教示できないわけでもないということの意味している。あるいは、日本や日本人の方が優れているということをも意味していない。

しかし、武道ツーリズムが成立しているという事実は、たんなるスポーツや競技として以上に、空手が日本のものとして、あるいはわざわざ日本に行ってまでやるべきものとして認められているということの意味している。すなわち、日本文化としての固有性や真正性がここでは必要不可欠となっているのである。この点については、中国のカンフー劇に関する寒川による以下の指摘が参考になる。

[2004年に北京で上演されたカンフー劇について] 西洋人が持つサイドのいうオリエンタリズムを逆手に取ったセルフ・オリエンタリズム的演出の中で、観客の西洋人が高額の入場料を払って心地よいオリエンタリズムの世界に浸ることができるよう計算されているのである。(寒川：348)

観光ビジネスに限らず、外から伝統文化に関心をもたれる時、武道によく見られる外国人の入門はその例だが、そこに日本文化としての固有性・真正性は戦略的に不可欠なのである。(寒川：350)

つまり日本へ観光客をよぶためには「日本文化としての固有性・真正性」が必要となってくるわけで、それはまさに武道にうってつけの性質と考えられる。この要素がどのように政策に取り入れられているのか次にみてみよう。武道ツーリズムの管轄はスポーツ庁ということにもなるのだが、2020年3月には同庁がさらに「武道ツーリズム推進方針」を発表している。武道ツーリズム推進のため文部科学省管轄下に設置された「武道ツーリズム研究会」が出した報告書「武道ツーリズム推進方針——日本の武道が世界を繋ぐ」をみてみよう。「武道ツーリズム」推進のビジョン(目指す姿)として、「1. 『武道』が日本発祥であることの国際的認知(プレゼンス)の向上 2. 武道をインバウンド誘客のキラーコンテンツに→地域活性化, 収益を武道に還元 3. 体験を通じ

た『武道』ファン層の拡大、競技人口の拡大→日本の精神・文化の国内外への普及・発信」の三つを掲げている（武道ツーリズム研究会 2020）。ここで本論にとって重要なのは、空手を含む「武道」が日本発祥のものであり、「日本の精神・文化」の普及と発信が目指されている点である。たとえば「日本が誇る武道の精神性を未来につなげていくという機運を作りながら磨いていくことが重要」との記述もある（武道ツーリズム研究会 2020：11）。くり返しになるが、ここでいう武道において空手が念頭におかれていることは言うまでもない。

IV. 他国と競合する「武道」と「伝統」

武道を Martial Arts と訳す場合があるが、Martial Arts にはたしかに武道は含まれるものの武道以外の格闘技も多々含まれている。Martial Arts Studies という近年研究の蓄積が目覚ましい分野では、当然のことながら中国をはじめとした東洋の格闘技が関心の核をなしており、日本の武道についても関心が高いとはいえ、Martial Arts の一部でしかない（Bowman ed. 2018）。しかも、いわゆる西洋文化圏から見た際に、「日本のものの空手」であるか「中国のもののカンフー」であるかすらそれほどたいして変わらないことだと見なされている点についてはすでに論じた（柄本 2023）。すなわち、インバウンドを見込んだ武道ツーリズムというのは、実は日本以外の東洋、とりわけカンフーや少林寺拳法などの中国や、ムエタイなどのタイ、テコンドーなどの韓国と競合するものでもあるのだ。先にみた「武道ツーリズム推進方針」でも「海外においては、一部の外国人を除き、武道＝日本という認識は決して浸透しているわけではなく、他の格闘技も含めたマーシャルアーツとして一体的に捉えられている側面がある」と述べられている（武道ツーリズム研究会 2020）。

たとえばイギリスの研究者である Deng は、中国とタイの格闘技（Martial Arts）ツーリズムについて議論している。つまりルーツを中国やタイにさかのぼるような格闘技ということになるのだが、それはカンフーとムエタイのことを指している。Deng は、そのツーリズムを成立させるために「アジア的男性性」の表象がそこで重要視されていると指摘する。しかしその論法でいくのならば、空手もまた同じように「アジア的男性性」で説明可能かもしれないのだが、そのこと自体の妥当性を問うことは本論の目的ではない。ただここで言えることは、同じアジアの Martial Arts ではあるけれども、空手のモビリティは「アジア的男性性」だけでは説明しきれない、ということである。ともあれ格闘技ツーリズムというくくりでいうならば、たとえば西洋から向かう先はけっして日本だけではなく中国をはじめとしたアジア全域に及んでいるということである。したがって、武道ツーリズムにおいてより一層の「日本らしさ」が要求されることになる現状について考察するなら、武道だけを切り取ってきて議論するのではなく、アジア的 Martial Arts の一種であったり、後述する沖縄空手が典型のように、武道にくくられてはいるもののその来歴は「日本のもの」とは言い難かったりすることを念頭におきながら、包括的なつながりの中で考察することが重要になってくるのだ。

そもそも武道は日本古来と言いきれるものではなく、中国に端を発する儒教と言ったようないわゆる東洋思想の影響を受けている（寒川 2014）。日本固有のものであるのか否か、といった議論がここでの眼目ではないのだが、日本オリジナルなものとは言い切れない背景があるにもかかわらず日本のものであるという真正性や正当性が必要とされている、ということが本論にとっては重要になってくる。そこで必要になってくるのが「伝統」である。過去にさかのぼればさかのぼれるほどに価値が増すとするなら、前近代の過去から延々と現代へと続くものであるかのように空手は「日本古来の」「伝統である」と見せるのに、武道と結びつけることは有効であったといえ

よう。ここで参照しておきたいのが、ホブズボウムらによる、「創り出された伝統」という以下のように説明される概念である。

〔「創り出された伝統」とは〕通常、顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の慣習であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質。事実、伝統というものはつねに歴史的につじつまのあう過去と連続性を築こうとするものである。(Hobsbawm 1983=1992: 10)

この示唆を本論の関心に引きつけるなら、武道がいかにして伝統とみなされるようになるのか、という問いにつながる。たとえば、武道概念の形成過程について議論する中嶋は、学制が公布された明治五(1872)年のあと、武術がいかに学校教育に参入したかについて次のように述べている。

学校において武術の価値は実践性以外に求めなければならなかったためである。つまり、武術の技術修得それ自体に価値を見出すのではなく、技術修得を通して得られる副次的な効用の価値が議論されたのである。(中嶋 2017: 52)

中嶋のいうような「副次的な効用の価値」については、井上が次のように述べていることと重なるものと考えていいだろう。

武術や武芸が「武道」と呼ばれるようになり、武士道思想とも結びついて独特の形をとりはじめるのは、明治も後半になってからのことである。(中略)昭和初期、一九三〇年代に入ると、武道は急速な発展を示し、同時に軍国主義イデオロギーとの結びつきを強めていく。(中略)「人格の陶冶」や「精神修養」の強調といった形で、なおいくぶんかはかつてのニュアンスが残されている。(井上 2004: 3)

以上の指摘が示唆するように、「伝統」がつくられていく過程においては、さまざまな価値が結びつけられていく。それは武道も同じであって、しかも格闘技ツーリズムという市場において、(ホブズボウムの言を借りるなら)他国と競い合うためにはより一層の「歴史的につじつまのあう過去と連続した」「日本らしさ」という要素が必要不可欠なのである。

そして実は、「伝統」と結びつつ繰り出されていくさまざまな「日本らしさ」のイメージとセットになった空手は、前章で見たようにそもそも沖縄(琉球)由来であることから「沖縄(琉球)」とも競合することになる、という空手特有の事情があるのだ。したがって空手の場合、競合するのは「他国」だけではなく、「国内もまた」なのである。

V. 沖縄空手の歴史とツーリズム

イギリスをはじめとした海外において空手を実践している人びとは、それが日本由来のものであることは当然のことながら認識している。なぜそのように言えるかという点、空手にまつわる語彙や稽古の動作において、多数の日本語が使用されているからである。あるいはまた、実践者たちが身につけている道着をはじめとしたウェアや試合会場には「日の丸」の意匠が多々見受け

られる。したがって、「東洋」や「中国」というのではなく、「日本」につながるものとして空手を実感し想起しているということはいえそうだ。それはもちろん柔道をはじめとした他の武道も同様であるが、空手の場合は歴史的背景や伝達の過程が異なっており、そこに「沖縄（琉球）」が介在していることにより、たんに「日本の武道」受容という考察だけでは不十分である。

ここで紙幅を割いて議論しなければならない問題が発生する。それは、はたして空手は武道なのか否か、いつからいかにして武道となりえたのか、という論点のことである。沖縄発祥の空手は、いったん本土に渡り日本化されることによって空手として世界中に輸出されたという一面も有している。すなわち、日本のものとして伝播されていく過程において武道化することが重要であったということだ。

たとえば「沖縄という一地域の武術でしかなかった空手」という言い方をしつつ、やはり「空手を社会的価値あるものとして教育制度に導入」したさいに重要な役割を果たした人物たちが「明治二三年〔1890〕年に陸軍教導団に志願して活躍したことが〔空手の普及にとって〕大きい」とも言われている（新垣 2011：48-9）。さらに空手を沖縄県外に知らしめるひとつのきっかけとなったのが、1908年8月6日に京都で開催された大日本武徳会での演武であった。すなわち「柔道の部の開催に先立った特別演技」（沖縄県 2021：14）として位置づけられた時点で、少なくとも武道あるいは武道に近似のものともみなされていた、と考えていいだろう。その当時の様子が以下の記述からうかがえる。

本格的な空手演武の公開としては、これが初めてということになるわけである。この時の観客の様子を翌日付『大阪時事新報』は、空手は「内地〔琉球〕特有の武技にして内地人の目には珍しければ輝く太陽に焼焦げて宛ら仁王に似たる勇ましの体と阿吽の声と呼吸を測れる刹那の掛声とは多大の興味を以て迎えられ喝采鳴りも止まず」と報じている。（沖縄県 2021：14）

さらに「内地」において強い印象を残した空手がその後あまねく伝播するのは、沖縄の空手家であった船越義珍が、1922年に東京で開催された文部省主催の第一回運動体育展覧会で空手を紹介するのをきっかけとして、国内どころか「国際的に重大なる使命」を視野に入れつつ空手普及に努めたことが大きい（沖縄県 2021：15）。船越義珍の名は、当然のことながら海外でも空手家の間で広く知られている。新垣もまた、中国拳法と沖縄空手との密なる関係を、琉球王国へ帰化した中国人の影響も含め以下のように詳細に議論している。

武術・空手。それは琉球王国と呼ばれていた沖縄において、中国武術と日本武術がミックスされ、日本本土に移入されることによって武道としての整合を果たし、世界に飛躍した身体文化だ。（新垣 2011：5）

この指摘は、琉球の空手が武道化されることで世界へ普及したことを端的に示しているだけではない。武道としてくられたものには、中国の影響を受けたものも含まれるということであり、したがってそのような武道を日本固有のものとして位置づけることの難しさも示している、といえよう。このことは、儒教、仏教、神道、道教といった武道の精神的屋台骨になっているといっている東洋思想の源流をたどったとしても同じことがいえる（寒川 2014）。

さて、ひとことで空手といっても数多くの流派があるのだが、沖縄県が振興しようとしつつ観

光資源ととらえている空手は、そのすべてではなく、武道化される以前から琉球に在った空手である。すなわち、あくまでも剛柔流、上地流、松林流、小林流、少林流などといったように沖縄空手あるいは沖縄伝統空手と位置づけられるものなのである。先述したように沖縄の空手が日本のものになっていく過程において、武道化というのは決定的に重要だった。

そんな歴史を知る空手愛好者にとって、沖縄と沖縄空手は特別であり、まさに彼らをつき動かす「情動の場」となる。そもそも自分の身体に長きにわたる空手の歴史が折り畳まれているのだ。日本ではなく、あえて沖縄へ向かう者たちはいっそうルーツをさかのぼろうとしている。

そしてとりわけ沖縄への空手に特化したツーリズムは、さまざまな展開をみせている。その過程をここで整理しておこう。

沖縄県では、翁長雄志知事時代の2016年4月に文化観光スポーツ部内に空手振興課が設置された。琉球新報によると、「都道府県に『空手』を冠した課が設置されるのは全国初」である（『琉球新報』2016.2.13）。その後中心的な物理的位置を占めシンボルとなる空手会館が2017年3月4日に開館される。空手の試合や世界大会が開催される道場はもちろん、そこには博物館が併設されており、お土産物も売られている。館内には飲食店もあり、ここでは空手そばが提供されている。たとえば、2023年12月21日から2024年3月36日に開催された企画展示「欧米人のみた琉球・沖縄の武術」では、海外で沖縄空手のいずれかの流派に属し道場を開く空手家たちのインタビュー動画が上映されていた。そこに登場した空手家たちは、JapanではなくルーツとしてのOkinawaとの技術的かつ精神的つながりをひき続き求めていた。

また沖縄県も、そのニーズにこたえようとしている。特筆すべきなのは、独自にツアーガイドを養成するプログラムをもっている点である。それは「聖地・沖縄空手ガイド養成事業」といって、英語や中国語、スペイン語に堪能な人びとを対象として沖縄空手ガイドの養成が試みられている。「世界1億を超える空手愛好家が探求するディープな沖縄伝統空手のニーズに対応する人材づくり」なのである（沖縄空手会館 2024）。

また沖縄県は2018年3月に、2037年度までを射程に入れた「沖縄空手振興ビジョン」を発表している。そこでは全編で「沖縄のものとしての空手」が次のように語られている。

沖縄を発祥の地とする空手が、世界中の人々を魅了するのは、沖縄に古くから伝わる「空手に先手なし」の理念に表される平和を希求する心や、先人によって創造され受け継がれてきた空手の真髄ともいえる型が、見る者の心に深い感動を与える美しさを持つとともに、型に秘められた精緻な技を解釈し身につけたいという思いを人々に抱かせることと、厳しい鍛錬を通して得られる本当の自信と人格形成につながる思いやりの心が育まれるからだと考えられます。（沖縄県 2018：1）

すなわちここでは「日本らしさ」というよりもむしろ「沖縄らしさ」が希求されていると言っている。そして空手のルーツが沖縄空手であるという歴史的事実こそが、日本のものとしての空手の真正性や固有性が要求される「伝統」をより強固にしている。すなわち空手の伝統と本物らしさを支えているのは、沖縄空手の実践あってこそ、ということと言えるだろう。

しかし実際に海外から日本を訪れた場合、飛行機発着の利便性やさまざまな観光スポットのことを考えると、東京や京都といった観光地に日程の多くがまず割かれてしまうことになりかねない。実際、2024年11月に10日間の日程で来日した筆者の知る、イギリスで空手を指導する黒帯有段者たち四人は、空手のルーツが沖縄にあることも熟知しており「沖縄にもいずれ行ってみたい」

とは言っていたものの、先ずは東京、箱根、京都、奈良、広島、宮島をめぐる予定でツアーを組んでいた。滞在中に日本人指導者による稽古を体験したのだが、それは東京都内にある空手道場だった。もちろん、沖縄滞在だけを目的として来訪する空手家たちも少なくはない。しかし多くの訪日客と同様、空手家であっても他の滞在先が優先されてしまうことは否定できない。いずれにしても沖縄はなかなか遠いという地理的な問題はある。要するに、船越義珍の思想が育まれた空手発祥の地を訪れてみたい、と思ったとしても限られた予算と日数でなかなか沖縄までどりつけない、ということはある。沖縄空手で観光客をひきつけるコンテンツの充実と発掘、アピールが今後の課題ということになるだろう。しかしこのことは、発見されることを待つ沖縄の魅力と可能性、ポテンシャルを示すものであって、限界を意味するものではない。

VI. おわりに

ビジネスとしての空手観光について論じるのではなく（Gonzalez 2020）、本論は表象と歴史的観点から観光資源としての空手についてモビリティ論を参照しつつ考察した。

空手家あるいは空手愛好者たちは、武道ツーリズムの振興なくとも日本を訪れるだろうし、アウトバウンドというモビリティあつてのインバウンドであることは以上でみてきた。したがって今後は、観光事業の目玉としてだけではなく、本格的に魅了されている人たちがすでにいるという現実をみきわめ、その人びとを落胆させないような方策が必要となるだろう。

換言するなら、インバウンドを振興するのであるならば、「伝統」を支えたり創り出したりすることに熱心にならなくてはいけないだろうし、さらなる空手振興策を含むアウトバウンドも重要になってくるだろう。しかし、平板な日本らしさをしてあぐらをかくだけでは、十分に本物らしさを身に刻んでいる海外実践者からは見放されてしまうかもしれない。そこでルーツに立ち返り沖縄のものであることに特化することにより沖縄空手の価値は保たれることになる。それだけでなく、かつて普及のために武道化して「日本のもの」となった沖縄空手であるが、今日の武道ツーリズムの振興においては、沖縄空手の真正性と固有性こそが、ひいては「日本の空手」の伝統的価値を高めるといふ逆転現象を起こしていることも重要になってくる。

本論の延長線上にある今後の展望としては、沖縄空手が海外へ伝播されていく過程について人物や表象の痕跡をより詳細に追い、それらがどのように世界各地の人たちに受容され実践されているのか、さらには空手の実践が身体化される過程においてどのように「日本らしさ」や「沖縄」が認識され消費されるのか、ということについて、具体的に事物や人物を追いつつ検証していきたい。

謝 辞

本稿執筆において、沖縄伝統空手道振興会の仲村顕氏、沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課の桃原直子氏には資料をご提供いただくなどご協力をいただいた。ありがとうございます。

また本稿は、東京国際大学特別研究助成（2024年度）の助成を受けている。

参考文献

- 新垣 清, 2011, 『沖縄空手道の歴史——琉球王国時代の武の検証』原書房。
 P. Bowman ed., 2018, *The Martial Arts Studies Reader*, Rowman & Littlefield Intl.
 武道ツーリズム研究会, 2020, 「武道ツーリズム推進方針——日本の武道が世界を繋ぐ」, スポーツ庁ホーム

- ページ, (2024年9月16日取得, https://www.mext.go.jp/sports/content/20200330-spt_stiiki-000005408-05.pdf).
- Deng, Jiange, 2022, "Beyond self-Orientalism: Asian masculine landscapes in Chinese and Thai martial arts tourism," *Tourist Studies*, Vol. 23, no. 1 pp. 8-24.
- 柄本三代子, 2023, 「Karate Kid コンテンツに見いだされた教育的価値と空手の世界的伝播」『メディア研究』103: 133-151.
- Gonzalez de la Fuente, Eduardo, 2021, "Recentring the Cartographies of Karate: Martial Arts Tourism in Okinawa," *Journal of Martial Arts Anthropology*, Vol. 21, no. 3, pp. 51-66.
- Hobsbawm, Eric and Terence Ranger ed., 1983, *The Invention of Tradition*, Press of the University of Cambridge. (前川啓治他訳, 1992, 『創られた伝統』紀伊國屋書店.)
- 星野 映他, 2022, 『フランス柔道とは何か』青弓社.
- Ingold, Tim, 2007, *Lines: A Brief History*, Routledge. (工藤 晋訳, 2014, 『ラインズ一線の文化史』左右社.)
- 井上 俊, 2004, 『武道の誕生』吉川弘文館.
- JTB コミュニケーションデザイン, 2020, 「武道ツーリズムへの興味関心に関わる調査」, スポーツ庁ホームページ, (2024年9月16日取得, https://www.mext.go.jp/sports/content/20200330-spt_stiiki-000005408-07.pdf).
- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford University Press. (伊藤嘉高訳, 2019, 『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.)
- 中嶋哲也, 2017, 『近代日本の武道論——<武道のスポーツ化>問題の誕生』国書刊行会.
- 沖縄空手会館, 2024, 「令和6年度沖縄空手ガイド研修生募集のお知らせ」(2024年9月19日取得, <https://karatekaikan.jp/blogs/news/>)
- 沖縄県, 2018, 『沖縄空手振興ビジョン』(2024年9月30日取得, https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/009/652/vision2.pdf)
- 沖縄県, 2021, 『沖縄空手流派研究事業解説書 首里・泊手』沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課.
- 沖縄県, 2022, 『沖縄空手実態調査業務報告書』沖縄県文化観光スポーツ部空手振興課.
- 寒川恒夫, 2014, 『日本武道と東洋思想』平凡社.
- スポーツツーリズム, 「武道ツーリズムとは?」(2024年9月19日取得, https://sporttourism-japan.com/budoBtoB_about.html)
- スポーツ庁, 「スポーツツーリズムに関する海外マーケティング調査報告書」, スポーツ庁ホームページ, (2024年9月16日取得, https://www.mext.go.jp/sports/content/20200330-spt_stiiki-000005408-12.pdf)
- 富山一郎, 1990, 『近代日本社会と「沖縄人」——「日本人」になるということ』日本経済評論社.
- Urry, John, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the twenty-first Century*, Routledge. (吉原直樹監訳, 2006, 『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.)
- Urry, John, 2007, *Mobilities*, Cambridge: Polity Press Ltd. (吉原直樹・伊藤嘉高訳, 2015, 『モビリティーズ——移動の社会学』作品社.)
- Urry, John, and Jonas Larsen, 2011, *The Tourist Gaze 3.0*, Sage Publications. 加太宏邦訳, 2014, 『観光のまなざし〔増補改訂版〕』法政大学出版局.)